

# 史遊サロン通信

No.257号  
平成29年  
3月5日

編集  
042-754-9360  
arai-hiroshi@  
jcom.home.ne.jp  
新井 宏

## 今月の史遊サロンは三月十八日です

「トランプ劇場」もさることながら、「イギリスのEU脱退後」も、「韓国の新体制」も目が離せないのに、北朝鮮では「金正男の暗殺」を公然と実行、秘密警察「人民軍保衛部」の幹部五人が銃殺されたとも言います。日本でも週刊誌には「小池劇場」のニュースが賑わっていて、まあ、ドラマを見ている立場ではこんなにエキサイティングな時期はないでしょう。

ポピュリズムの行き着くところは、エミール・クーエの法則、すなわち「努力逆転の法則」のように、「願望に向かって努力すればするほど、深みにはまって逆の結果」をもたらします。歴史に遊ぶ者として、通常なら題材を過去に求めますが、現今の情勢では、現在の歴史に忙しく、過去の題材を丁寧に拾っている余裕がありません。

だから『史遊会通信』や『まんじ』に、韓国における「努力逆転の法則」の事例を書きまくっています。

金正男暗殺事件に関連しては、李氏朝鮮の王位後継をめぐる十五年に一回、党争による粛清や殺戮事件が起きていたことを「政争の国」として書きました。また、「平壤版王子の乱」として、王位継承が決まった金正恩が「人民軍保衛部」を動員して、金正男の平壤滞在時の隠れ家を襲撃して暗殺を謀った事件のことも書きました。その頃、中国は金正恩の世襲を渋っていましたが、何とか同意したのは、それほど中国が北朝鮮の崩壊を恐れていたことの証左でした。

歴史的に見ると、李朝の王位継承は、原則として中国王朝の「勅許」を得て初めて、その正当性が保証されていきました。それなのに、今や金正恩はついに金正男を暗殺して中国王朝にたてつきました。それだけ金正恩が

今月の史遊サロンは予定通り第三土曜日の三月十八日です。会場は定例の銀座ルノアール八重洲北口会議室。なお、五月の史遊サロンも予定通り第三土曜日の五月二十日です。「自由執筆」については、随時お寄せ下さい。「埋め草」も大歓迎。

追い込まれている証拠ですが、近く「努力逆転の法則」が起こるに違いないと思います。また、危険で無能で傲慢な朴槿恵の外交政策について「ポーランドと韓国」や「セウォル号事件」や「韓国の玉璽事件」などで盛んに書きましたが、朴槿恵が「親日」の烙印をおそれた行動のせいで、今や次期大統領候補の五人が全て「反日」となる「成果」を生み出しました。うっかりすると米国から放り出される危険な状態となっています。

二月末に『もし77歳以上の波平が77人集まったら?』と言う本が出ました。話題の『もし波平が77歳だったら?』の第2弾企画のようですが、三戸岡道夫さんと太田精一さんが「私たちは生涯現役!」と執筆されています。カナリアコミュニケーションズ出版です。

## ハラダイムの変遷

— 現代はいかなる時代か —

諸橋 奏

一 「ハラダイム」とは……

ハラダイム（ギリシア語のパターンを意味する）の語が生まれるにいたる西洋科学を中心にその歴史の流れを眺めると

・ 紀元一四〇年頃のギリシアの天文学者プロレマイオスによって公式化された天動説が中世まで約一四〇〇年間絶対の權威を保っていた。

・ 中世（四世紀末ゲルマン民族ローマ領に侵入、三九四年キリスト教がローマ帝国の国教に、三九五年ローマ帝国東西に分裂、一〇九六年第一回十字軍〜一二七〇年第七回十字軍、一四五三年ビザンチン帝国滅亡）の世界観は「神を中心としてあらゆる物事を説明するものであった」。

・ ルネサンス—一三世紀末から一五世紀末にかけてイタリアに起こり、次いで全ヨーロッパに波及した人間中心および自然発見の革新運動が—

・ 一八世紀に入って始まった近代科学においては「神なしに説明できるようになった」それには次の人々の貢献が大であった。

ニコラス・コペルニクス（一四七三〜一五四三）ポーランドの天文学者。地動説を完成させ、近世世界観を樹立。

アイザック・ニュートン（一六四二〜一七二七）イギリスの物理学者、天文学者、数学者。ガリレオによる地上の物理学とケプラーによる天上の物理学を統合し、近代物理学の基礎を確立。

ルネ・デカルト（一五九六〜一六五〇）フランスの哲学者、科学者。精神の存在を物質の存在から峻別し（二元論）、近代科学のハラダイムを最初に確立した思想家。

そしてこの近代科学は「全ての現象の背後に物理化学的な法則・性質のみを認め、全ての存在を（人間さえも）ただ物質の集合体として考える、機械論的世界観・還元主義的手法」を推進するに至った。

・ 二〇世紀に入り、アインシュタインがニュートン力学の基本前提である「絶対時間・絶対空間」を否定し、科学の世界観に改革が始まった。

アルバート・アインシュタイン（一八七九〜一九五五）スイスの理論物理学者。光量子仮説、特殊及び一般相対性理論を発表。二〇世紀物理学の基礎を築く。ノーベル物理学賞受賞。

続いてのプランク、ボーア、ハイゼンベルクらによる量子力学により、従来の物理学の概念は根本的に再解釈を余儀なくされた。

マックス・プランク（一八五八〜一九四七）ドイツの理論物理学者。量子仮説を発表。ノーベル物理学賞受賞。

ニールス・ボーア（一八八五〜一九六二）デンマークの理論物理学者。相対性原理。量子論の父。ノーベル物理学賞受賞。東洋の陰陽五行説に共鳴。

ヴェルナー・ハイゼンベルク（一九〇一〜七八）ドイツの理論物理学者。量子力学の創始者。不確定性原理を提唱。龍樹、インドの思想家タコールに傾倒。

・ この量子力学により因果的決定論に基づくニュートン・デカルトの古典物理学的世界像の崩壊・ロゴスの崩壊が明らかになった。

一九六〇年代に興った新科学哲学の潮流はトマス・クーンに代表される「ハラダイム論」である。クーンはその著「科学革命の構造」で「科学的真理は永遠不変の真理ではなく、ハラダイムという歴史的枠組みに相対的にしかその妥当性をもちえない」と「生成する真理」を提唱した。

トマス・クーン（一九二二〜一九九六）アメリカの科学史家、マサチューセッツ大学教授。

これから先、あらゆる現象にパラダイム論は当てはめられていくことになる。「世界観」の転換、「基本的枠組み」の転換というような意味に用いられる。

・ところで、ニューサイエンティストの多くが、ある神秘的体験を持つという。

ボア、ハイゼンベルクについては上記のごとくであり、更に列記すると

ロバート・オッペンハイマー(一九〇四～六七)アメリカ、ロスアラモス研究所長。原爆の父。古代インドの哲学書「ウパニシャッド」に相似性を。

湯川秀樹(一九〇七～八二)理論物理学者。中間子論を発表。「素領域理論」のヒントは「荘子」に。

ブライアン・ジョセフソン(ケンブリッジ大、「ジョセフソン接合」でノーベル物理学賞。東洋神秘主義(インドのヨーガ、マハリシ・マヘシ・ヨーギ)に傾倒。

アーサー・ケストラー(要素還元主義批判の急先鋒、「ホロン」を提唱し、その洞察の源を神秘主義に。

・次のボームとプリブラムは実験で「目に見えないものを見る」神秘体験を。

デヴィッド・ボーム(一九一七～)ロンドン大、理論物理学、「織り込まれた秩序と開き出された秩序」を主張。

カール・プリブラム(スタンフォード大、神経生理学、「ネズミの迷路学習実験」で、ボームの「ホログラフィー理論」に同調。

・これらの現代科学の流れが示す世界観について、カルフォルニア大の物理学者、フリッチョフ・カブラは「天才自然学」を著し、「現代科学の説く世界観が東洋の宗教的世界観に相似している」と指摘した。更に「ターニング・ポイント」で、現在、世界が抱えている人類史的な危機は、デカルト＝ニュートンの世界観がもたらしたものであり、これを切り抜けるためにはあらゆる分野において新しいパラダイムに転換しなければならないと主張する。

引用・参考文献

「パラダイム・ブック」日本実業出版社昭和六二年 編集者 C+F コミュニケーションズ

「イミダス一九九一」集英社 一九九一年  
「世界の宗教と経典・総解説」自由国民社 一九八〇年

「新編日本史」原書房 昭和六三年  
「DNAが語る稲作文明」佐藤洋一郎 NHK ブックス 一九九六年

論説 BOOK 「パラダイム・ブック」医学部 ニューマン 昭和六二年 東北大学生新聞

「現代人の共通祖先」宝来聡 朝日新聞 平成七年二月

「遺伝子から見た現代人の起源」宝来聡 学士会会報一九九六年  
「遠藤周作のイエス像」柘植光彦 専修大学 平成一〇年

「サロン通信二五一号」より

因みに「東洋の宗教的世界観」については、まず日本の古神道・かむながらのみち(惟神の道)「神道は日本民族の形成以来、自然に対する独自の感受性をもとに、目に見えないカミの働きへの崇拜を育てたが、開祖や教理はもたなかった。むしろ、カミをまつり、<sup>みそぎ</sup>禊<sup>はらえ</sup>祓<sup>はらえ</sup>を行って心身を清浄にする、素朴な儀礼に基づく民族宗教であった」(山折哲雄『イミダス』<sup>91</sup> 宗教)。「自然は神慮のまま」と感受していたといえよう。

仏教は紀元前五世紀、インドの王子ゴータマ・シッダールタ(釈尊・仏陀・釈迦牟尼)が興した。釈尊の生存時代については欧州ではスリランカの歴史書を重視し、その誕生を紀元前五六六年、入滅を紀元前四八六年としているが、日本の研究者は文献学上「北方伝承

の仏滅からアシヨーカ王の即位算定の紀元前二六八年までを百十六年とし」誕生を紀元前四六三年と考えている。

釈迦時代の仏教、原始(初期)仏教の教えは悟りに至るまでの四つの真理「四諦」、この世の苦をひらくための八つの方法「八正道」としてまとめられる(『図解日本の仏教と宗派』宝島社)。釈迦入滅後百年経ったころ、上座部系統はもっぱら修業と禁欲により自己のみの完成を目指す立場をとる仏教としてセイロン、ビルマ、タイなどの南方に伝播(南方仏教)。一方大衆部からは大衆の救いを第一に考える、在家信者を中心とする大乘仏教が成立。中国、韓国、日本、チベット、モンゴルなどに伝播(北方仏教)した。

原始仏教から上座仏教(一九五〇年、コロンの世界仏教徒会議の決議で小乗とはいわないことに)をへて発展し最高形態に到達したといわれる大乘仏教には二大系統がある。一つは中観派といわれ、竜樹(りゅうじゆ)を祖とするもので空を教義の中心(根本真理)とし「一切の事物は縁起により成り立っており、永遠不変の固定的実体がない」と考える系統。

もう一つは唯識派といわれ、世親(せしん)(天親) (四〜五世紀ごろの北西インドの僧)が大成し

た説で、「唯識とは心のほかに法(存在するもの)がない、人間の心にふれて初めて世界が生じる」という考えである。しかし、この大乘仏教もインドでは滅び、中国・朝鮮では形骸化し、日本でのみ仏陀の心から生まれた大乘仏教の理念「慈悲(思いやり)」「すなわち本来「四苦八苦」の苦で出来ている人生から苦をなくす教えとして生きているというのが実情であろう。

中国仏教はともかく、中国の宗教的世界観を代表するのは儒教と道教である。

もつとも儒教は「宗教としてよりは社会道徳や政治倫理として」受容されているが。儒教の祖は孔子(紀元前五五一〜紀元前四七九)である。孔子は中国古来の思想家を尊崇してこれらを大成、仁を理想の道徳とし、孝悌と忠恕とを以て理想を達成する根底とした。忠恕とは「まごころとおもいやり」で、仁を天道の発現とみなし、一切の諸徳を統べる主徳とした。

一方、道教は儒家と共に中国の二大派をなし、その祖は老子(春秋戦国時代一紀元前七七〇〜紀元前二二二)で、「宇宙の根本原理(本体)を道(タオ)とする教説が根本をなし、道は絶対的であると、清静・恬淡・無為・

自然に帰すれば乱離なし」と説いた。後に老子の学は荘子(紀元前四世紀ごろ)が継ぎ「万物は斉同で生死などの差別を超越する」ことを説いた。

いずれにしても東洋の宗教的世界観は「自然を目に見えないカミの働き」と感受し、「誠者天之道也。誠之者、人之道也。」(中庸二十章)と知見する心の働きの根本としているといえよう。

私見としては、新科学哲学を代表する「パラダイム論」が指摘する「新しい世界観が『東洋の宗教的世界観』に相似している」との世界観は、仏教の「般若波羅蜜多」(正しい判断力による真実にとつたつするための実践)のことでありと思考しているのであるが。

(東洋大学教授金岡秀友記)

〔仏説摩訶〕 般若波羅蜜多心經

(唐三蔵法師玄奘訳)

観自在菩薩、行深般若波羅蜜多時、

照見五蘊皆空、度一切苦厄、舍利子、

色不異空、空不異色、色即是空、空即是色、

受想行識亦復如是、舍利子、是諸法空相、

不生不滅、不垢不淨、不增不減、是故空中、

無色、無受想行識、無眼耳鼻舌身意、

無色声香味触法、無眼界、乃至無意識界、

無無明、亦無無明尽、乃至無老死、

亦無老死尽、無苦集滅道、無智亦無得、

以無所得故、菩提薩埵、依般若波羅蜜多故、

心無罣礙無罣礙故、無有恐怖、遠離〔一切〕  
顛倒夢想、究竟涅槃、三世諸佛、

依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提、

故知般若波羅蜜多、是大神咒、是大明咒、

是無上咒、是無等等咒、能除一切苦、

真實不虛、故說般若波羅蜜多咒、即說咒曰

揭諦揭諦、般羅揭諦、般羅僧揭諦、

菩提僧莎呵

般若(波羅蜜多)心經

〔仏説摩訶〕 般若波羅蜜多心經

(唐三蔵法師玄奘訳す)

観自在菩薩、深般若波羅蜜多を行ずる時、五

蘊は皆空なりと照見して、一切の苦厄を度し

たもう。舍利子よ、色は空に異ならず、空は

色に異ならず。色はすなわちこれ空、空はす

不生にして不滅。不垢にして不淨。不増にし

て不減なり。是の故に空の中には色も無く、

受・想・行・識も無く、眼・耳・鼻・舌・

身・意も無く、色・声・香・味・触・法も無

く、眼界も無く、乃至意識界も無し。無明も

無く、亦無明の尽くることも無く、乃至老死

も無く、亦老死の尽くることも無し。苦集滅

道も無し。智も無く亦得も無し。無所得を以

ての故に。菩提薩埵は、般若波羅蜜多に依る

が故に、心に罣礙無し。罣礙無きが故に、恐

怖有ること無し。〔一切の〕傾倒夢想を遠離し

て、涅槃を究竟す。三世の諸仏も、般若波羅

蜜多に依るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得

たもう。故に知る、般若波羅蜜多は、是れ大

神咒なり。是れ大明咒なり。是れ無上咒な

り。是れ無等等咒なり。能く一切の苦を除き

真實にして虚しからず。故に般若波羅蜜多の

咒を説く。即ち咒を説いて曰く。

揭諦揭諦、般羅揭諦、般羅僧揭諦、菩提僧莎

訶 般若(波羅蜜多)心經

## 『仏教通史』用語解説 〈抜萃〉

## 空

存在するものには、実体・我がないと考える思想である。すべてのものは相縁<sup>よ</sup>り、相起こって存在するにすぎないから、実体として不変な自我がその中に存在する筈がない。したがって実体ありととらわれてはならないし、存在しないととらわれてもならないわけである。すべてのものは、人もその他の存在も相対的な関係にあり、一つの存在や主義にとらわれたり、絶対視したりしてはならない。般若経系統の思想の根本とされる。

## 慈悲

仏教におけるもつとも基本的な倫理項目で、「慈」とは相手に楽しみを与えること、「悲」とは相手から苦しみを抜き去ることである。これを体得して、対象を差別せず<sup>ほとけ</sup>に慈悲をかけるものが「覚者」すなわち仏であり、それを象徴的に表現したものが、観音・地藏の両菩薩である。やさしくいうと、慈悲とは「相手と共に喜び共に悲しんであげる」ということになる。

## 智慧(般若)

普通に使われている「知恵」とは区別し

て、わざわざ仏教では「般若」の漢訳としてこの言葉を用いているが、正邪を区別する正しい判断力のこと、これを完全に備えたものが、「仏陀」である。単なる知識ではなく、あらゆる現象の背後に存在する真実の姿を見ぬくことのできるもので、これを得てさとの境地に達するための実践を、「般若波羅蜜」という。

## 涅槃

梵語の「吹き消す」という意味の、ニルバーナという単語の漢音写で、「滅」「滅度」「寂滅」などと訳される。丁度ロソクの火を吹き消すように、欲望の火を吹き消したものが到達する境地で、これに到達することを、「入涅槃」といい、達したものを「仏陀」とよぶ。釈迦牟尼仏が亡くなった瞬間を、「入涅槃」ということもあるが、肉体が滅びたときに完全に煩惱の火が消える、という考え方からで、普通は、三十五才で仏になったときに「涅槃」の状態に達したと考えられている。

## 中島茂さんの友人の

## 「サイパン戦体験記」

一月二十一日の史遊会サロンの時、「新渡戸稲造」について熱く語った中島茂さんが、大学時代の友人・中川俊彦さんの「サイパン戦体験談」がとても感動的だと、平成二十五年八月十一日付の「埼玉新聞」のコピーを紹介されました。

その際、できれば中川俊彦さんをサロンにお連れして、紹介したいとのことでした。

その後、新しい連絡は入っていませんが、「水を探しに行った父を待たず、一生の別れとなってしまった」ことを語り継ぐ元公務員の中川さんは、平成八年春の叙勲(瑞宝中綬章)の際に、受章者を代表して天皇陛下に挨拶し、退出の際に、陛下から「サイパンでは大変でしたね」と声をかけられたとのことです。

おそらく、今月のサロンに出席され、ご自身の苛烈な戦争体験と平和への祈りをお話くださることになると思います。

## 出雲大社再考 (一一)

## 近世最大危機佐太神社紛争(3)

## 寛文遷宮と神仏分離

村上邦治

慶長一四年(一六〇五)の遷宮では、徳川幕府は豊臣家の蓄財を消耗させるため、秀頼を願主として、仮殿式(七丈以下)による本殿を建立させた。しかし本殿は朱塗りにされ、境内には三重塔、鐘楼など仏教施設があり、名刹鱒淵寺僧侶が読経し、神仏習合であった。

寛文元年(一六六一)、次の遷宮に当たり、国造(千家尊光)と社家(北嶋上官佐草自清)一体となって、正殿式(八丈)による遷宮と神仏分離を、幕府・松江藩に働きかけた。当時の寺社奉行井上正利(遠江横須賀藩主後常陸五万石笠間藩主)は、山崎闇斎に師事し、神仏分離に積極的な奉行であった。また松江藩主は、堀尾氏に代わって敬神家松平直政(家康の孫、結城秀康の子)が、寛永一五年(一六三八)に入国していた。

幕府は寛文遷宮に際し、四〇〇年以上途切れていた正殿式による本殿造営のため、將軍

家綱を願主、藩主直政を惣奉行として、造営費用全額の銀子二千貫目(金四万両現在価値四〇億円)を供出した。内訳は、材木費九百貫、大工・日雇等三二〇貫が主要なものであった。この時には撰・末社、拝殿などすべての社が建て替えられた。伊勢神宮(二〇年毎遷宮)の支援が、千五百両であったことから、異例の肩入れであった。

本殿造営で苦勞したのは、心御柱の檜を見出すことで、全国探しても難しく、やむなく杉に変えざるを得なかった。但馬国妙見山(兵庫県養父市)名草神社の御神木が適うことが判明、尼子経久が建立した三重塔(戦前国宝現国重文)との交換により、やっと手当てできたのである。本殿は、古来の白木に戻された。

同時に寺社奉行・松江藩から、境内から仏教的色彩のものは、すべて排除することが指示された。鐘楼、護摩堂や大日如来、観音菩薩などが、取り除かれた。常駐していた鱒淵寺僧侶や本願など、全仏徒を追放した。伊勢神宮の神仏分離は、明和六年(一七六九)の第五〇回式年遷宮からであり、大社では百年早く、明治維新廃仏毀釈の二百年前であった。

この時、祭神をスサノウ尊から、本来の大己貴神に戻された。長州藩主毛利綱広が正面に青銅鳥居を寄進したが、これには、祭神はスサノウ尊となっており、いかに慌ただしく大己貴神に戻したかを物語っている。

また年頭の將軍御目見順は、伊勢、石清水、離宮八幡の次であったが、伊勢に次ぐ二番目に行くことが許され、社格の向上が実現した。

こうして幕府と松江藩の全面支援により、正殿式本殿の復活と、神仏分離が一挙に実現され、近世における興隆期を迎えたのである。

(この項続く)

## 目白台と神田川周辺の空間観察

山本鎮雄

東京の中野区新井に生まれ、杉並区の荻窪で育った。その後、仙台と広島の地方都市で過ごし、東京に戻った。「目白の女子大学」に勤務した当初は授業と同僚との夜の付き合いがあつたり、また「書かざるものは亡ぶ」(清水幾太郎)という至言を信じ、当初は授業のないときは下宿で本読みと物書きに費やし、もっぱら下宿と職場を、講義、委員会や教授会の出席のために往来した。

次第に授業にも余裕が出来、授業の合間に目白台とそこを貫通する目白通りと神田川の周辺を散策し、タウンウォッチングするようになった。その頃、商店の看板、電柱に貼られたポスター、マンホールの蓋などの「物件」を観察し、それに「意味」を解説する「路上観察学」が流行していた。

私に関心を持ったのは、個々の「物件」ではなく、目前に繰り広げられている「都市空間」だった。路上の周囲を観察し、生き生きとした生活や隠された歴史を解説することを試みた。このようなタウンウォッチングを私は

「空間観察学」と称し、その実習にはまりこみ、「一人遊び」をした。

その際、江戸末期の嘉永年間に発行された「尾張屋版江戸切絵図」三十二枚のうち、「雑司ヶ谷音羽絵図」(以下、「切絵図」と省略する)と最新の地図を携帯した。目白通りや不忍通りをはじめ、道路とその横町を歩き、街並み、敷地や家屋の規模を探り、道路が直線か、曲がりくねっているか、あるいは幅員の長さなどを注意ふかく比較すると、まず概念図を作成して、各地域に見通しを立てたが、まったく異なることが分かった。

## 三つの地域の比較

そもそも、目白の地名は江戸川(現在は神田川)に沿って、高台に長谷寺があつて、江戸五色不動の一つ、目白不動が設置されていた。現在は廃寺となり、豊島区の金乗院(新長谷寺)に、狐の白色のレプリカと思われたが、設置されていた。とまれ、目白、目白台、目白通りの地名は目白不動、それに通じる目白坂に由来する。

目白通りは「小石川・目白台」の山伝いの尾根道である。山手線の目白駅前から椿山荘方面へ都営バスに乗り、その途中で明治通りと交差する高い千登世橋があつて、バスの窓

から見下ろすと、目白通りは目白台の尾根道を整備拡張したことが分かる。

さて、私が作成した概念図によれば、Aの地域は目白通りに沿い、文京区に限れば、広い敷地にある日本女子大学豊明小学校、旧田中角栄邸、目白運動場、椿山荘、東京カテドラル聖マリア大聖堂その他がある。目白通りから急傾斜の胸突坂を下ると、芭風園、永青文庫、さらに中央に池があつて、回廊式の庭園の新江戸川公園などがある。

「切絵図」によれば、徳川幕府から拝領された諸大名(松平、細川、黒田、小笠原、溝口など)の広大な下屋敷が目立つ。下屋敷は江戸市中の大火の際、避難用として、また夏季の避暑用として造作された。高台からは、江戸市中や富士山を眺望することが出来る格好の適地であろう。

Bの地域は、その大部分は武家屋敷と組屋敷だった。一部は大名の下屋敷だった。全体として街区の形態や敷地割りは整然としていて、道は広くはないが、住宅地として独立していた。「切絵図」を見ると、矢場や的場、鉄砲坂があり、弓組や鉄砲組の中級・下級武士の武家屋敷か、与力・同心の組屋敷があつたのであろう。中級武士は主君から三百坪ほどの敷地を与えられ、住屋を自前で造作し



た。下級武士は百坪ほどの敷地を与えられ、そこに住屋を自前で造作したようだ。

江戸時代の武家屋敷と組屋敷は、今では敷地は細分化され、住宅も密集し、商店、事務所、マンション、アパート、駐車場、銭湯などが混在しているが、それでも地域として独立性が強く、緑の多い閑静な住宅地である。この地域に日本女子大学があるが、新潟にあった新発田藩の藩主の溝口又十郎の下屋敷であったという。

Cの地域は、「切絵図」を見ると、清土道（現、不忍通り）に沿って、その西側の武家屋敷が数軒あるが、百姓町と畑地が広がっている。そして目白通りと鬼子母神の門前通りに沿って、町人が住む「町家」がある。鬼子母神の参道には茶屋、蕎麦屋、土産物屋が軒を並べていたようである。

この地域を雑司ヶ谷という。その地名は時代によって雑式谷、蔵主ヶ谷、僧司谷などと称して一定していなかった。八代將軍吉宗が来着した時、あまりにも「混雑」していたため、「混雑之雑之字相用可」との上意があったという（『御府内備考卷之五十二』）。それ以後、雑司ヶ谷と称したのであろう。

関東大震災以前から、畑地は次第にスプロール化が進み、農地のなかに虫食い状態のよ

うに住宅が建てられた。関東大震災以後は急速にスプロール化が進んだため、道路はくねくねと曲り、きわめて雑然とした住宅地となった。この雑然とした地域を堪能するのにも一興であろう。

#### 「山の手」の場末

江戸の怪談物の代表作は四世鶴屋南北の「東海道四谷怪談」（文政八（一八二五）年初演）であろう。お岩さんの幽霊で知られているが、江戸市中で囁かれた猟奇事件や怪談、さらにゴシップを盛り込み、歌舞伎狂言として創作された。ここでは、「四谷怪談」のあらすじを省くことにする。

第二幕の最初は「雑司ヶ谷四ツ谷町の場」、伊右衛門の浪宅である。鹽治の浪人民谷伊右衛門は浪宅で傘張りの賃仕事をして糊口を凌ぎながら、邪魔になったお岩を毒殺し、先祖伝来の妙薬を盗んだ小仏小平を殺害した。伊右衛門は間男中に見せかけるため、二人の死骸、戸板に打ち付けすがたみの、川へながしてすぐに水葬。夜陰に乗じて、目白通りを横切り、「宿坂」を下り、神田川の姿見橋から投げ込んだのであろう。

第二幕は二人の死骸を戸板に釘で打ち付け、江戸川（神田川）に流された事件をもとに歌舞伎狂言にした。井の頭の弁天池を水源

とする神田上水、中流部を江戸川と称し、江戸市中に清浄な「上水」飲料水を供給した。その上水に死骸が投げ込まれたのだから、江戸市中はしばらく大騒動になったであろう。「すがたみ」とは、江戸川の傍に二か所の清浄な水溜まりがあつて、「姿見」の鏡のように透明に映ることに由来する（今は面影橋と称している）。

さて、「切絵図」を見ると、雑司ヶ谷には「四谷」の地名はなく、目白通り沿いに当初は町人が住む「四軒之家」があつたのである。そのため、「四家町」と名付けられ、一帯を町人町となつたのであろう。今も目白通り沿いに、豊島区二丁目に小さな「四家公園」という児童公園がある。「四家町」は町方支配の町人地である。だが町人とは別に、民谷伊右衛門のように手内職で日々の糊口を凌ぐ浪人たちには脱出願望が渦巻き、江戸城下の「山の手」の疎外された場末である。

歌舞伎狂言『四谷怪談』の第二幕の場面が「四谷」ではなく、「切絵図」を見て、実はその場面は「四家町」だと指摘しても、それはただの「狂言」の舞台上に過ぎないのではないか、それがどうしたと、歯牙にもかけられないことは十分に承知している。だが、私は

目白通りを街歩きをして、気付いたことをそのように指摘したに過ぎない。

すでに触れたように、目白通りを歩いていたら、御影石の石柱に「四家公園」という標札があった。「切絵図」を見たら、そのあたりの雑司ヶ谷に「四家町」という町人町があった。歌舞伎の演題で「四家」では格好がつかないの、鶴屋南北は演題をあえて「四谷」としたのであるうか。

「切絵図」では、目白通りの角を北に入ると、鬼子母神の参道に町家が軒を連ね、田畑に囲まれた鬼子母神に着く。鬼子母神は徳川將軍の八代吉宗將軍から十一代家齊將軍にかけて、頻繁に参詣したため、諸大名・旗本をはじめ、町人・農民がこぞって参詣して賑わったという。

鬼子母神は安産・子育ての神様として信仰された。先祖代々子々孫々と家の永続を願う老若男女には参詣に大いに値する。今も境内には川口屋という売店があつて、芒(すすき)の穂でつくったみみずくの土産物が売られている。江戸期には門前に料亭、蕎麦屋、茶屋が軒を連ね、参詣人で賑わった。土産物の一つとして人気があつたのは、五色の風車で、こんな川柳が詠まれた。

帰り道、急げば廻る風車

風車わるく廻ると泊りがけ

鬼子母神の参詣の帰り、目白通りを横断し、南に江戸川へ向かう「宿坂」がある。この坂道を下ると、平坦になり、高田砂利場村に大鏡山南蔵院がある。この寺院は江戸末期から明治中期にかけて活躍した落語家の三遊亭円朝の「怪談乳房榎(ちぶさえのき)」の舞台である。

この怪談は絵師の菱川重信が南蔵院本堂の天井に雌竜雄竜を描いた途中、重信の妻をかどわした浪人の門弟によつて江戸川の河原で殺害された。

神田上水は、妙法寺川と善福寺川が「落合」(おちあい)で合流し、その下流は水量を増し、広い河原となっていた。河原には大きい源氏蛭が飛び交い、夏の蛭狩りや夕涼みは江戸の一大名物だった。この怪談噺に戻せば、前半のクライマックスは、河原で殺害された重信の怨霊が南蔵院本堂に戻り、天井に描き残した竜のひとみを描き、跡形もなく、姿を消すというシーンである。

江戸「山の手」の光と影

目白台と神田上水、それを結ぶ「宿坂」は「切絵図」によれば、樹木が茂り、昼なお暗く、俗に「くらやみ坂」ともいわれた。この坂をお岩と小平の死体を夜陰に乗じ、戸板で

運ばれた。偶然とは言え、南北の歌舞伎狂言と円朝の落語の二つの怪談噺の舞台に取り上げられた。

雑司ヶ谷と高田の町人町は江戸八百八町の場末として影を象徴していたといえよう。だが、江戸の場末として影を象徴していると言っても、光と交叉して影がある。ところが、江戸川(神田川)とその周辺は、江戸市中の武士や町人が日常の「ケ」から解放される「ハレ」(非日常性)の世界、日帰りピクニックの格好のコースで、光が照射する都市空間を堪能することができるであろう。

江戸川付近は日帰りのピクニックコースである。対岸に早稲田の田圃を見ながら、江戸川橋のはるか手前に両側を石で組まれた大洗堰(おおあらいのせき)がある。この堰で上水と河水に分水された。

豊富な上水は江戸市中の飲料水となる。河水は神田川、江戸城の外堀を流れ、隅田川に注ぐ。すでに神田川(江戸川)に沿って江戸公園があり、花見の名所である。

江戸川橋の北側には今もそれほど広くない目白坂(旧道)があつて、それを登ると、坂上に目白不動を祀った長谷寺があつた。江戸市民の信仰を集めただけでなく、境内には料理屋や茶店が並び、江戸市中を一望出

来る格好の景勝地だった。だが、廃寺となり、目白不動は金乗院(新長谷寺)に移されている。

十月の夜、目白通りを歩き、目白駅に向かうとした。その途中、鬼子母神に向かう、飾りのついた万燈(まんどう)を先頭に、近在の信者が各地から「講」というグループ毎にリズムカルに太鼓を叩きながら、「南無妙法蓮華經」とお題目を唱えて参拝する盛大な御会式に出会ったことがある。その日は日蓮の入滅の日だったという。

鬼子母神社殿では祖師像にお餅を供え、昼夜読経するというが、帰りを急いでいたので、社殿まで見物に行かなかった。近隣の小学校では、その日が近づくと、子どもは学校の休み時間になると、一斉に二本の棒でセルロイドの筆箱を叩いて興じているという。学校行事の学芸会や運動会とは異なり、子どもは日々の「ケ」から解放された地域の「ハレ」の日が待ちどおしかったのであろう。

かつて、目白台と神田川の周辺を街歩きした。タウンウォッチングには格好の舞台だった。なぜなら、江戸時代の残像と、現在に至る歴史的な変容を物語る「都市空間」だった。この「都市空間」は自然との共生か、あ

るいは改修によって、それぞれの時代の治世者の統治と開発、演劇の脚本家による描写、生活者の生きた営みによる所産に他ならない。

そこに住む人々にとって、確かに「環境」や「立地」が良いとか、悪いとかいう点では、日常生活に直接の「意味」を持つに違いない。だが、「都市空間」がハイマート(故郷)として「意味」をもつのは、何よりもそこに自らの「人生の意味」を主体的に問いかけ、行動的に働きかけた場合であろう。

このモビリティ(移動性、流動性)の顕著な時代にハイマートは生まれ育った地にただ郷愁を覚える場所に留まることは出来ない。ハイマートは「場所へのシンボリックな愛着」(レンツ・ローマイス)を持つ「都市空間」であり、人間的な交流を通して実現されるコミュニティ(地域社会)もまた「都市空間」の一部であろう。だが、自ら住む「都市空間」に人生に「意味」を与えなければ、人生を通り過ぎるただのプラットホーム(通過駅)に過ぎないであろう。

目白通り沿いには関東大震災後に松の木で建てられたという酒屋を見かけた。今でも天井に松脂が出てくるという。佃煮屋や畳屋、さらに鳥屋、その店の軒先に雉が吊り下げら

れていた。古くからに伝統を守っているのであろう。

ところが、次第に高層ビルが建ち、一階に高級レストラン、プレタポルテ(高級既製服)の店を見かけるようになり、二階以上はおそらく分譲か、賃貸のアパートメント・ハウスであろう。そのうえ、分譲方式の中高層のマンションも建つようになった。かつての「都市空間」としての情緒も景観も一変し、白髪混じりの年寄りになった我が身は、確実に浦島太郎の心境になり、ただのプラットホームに過ぎなかったかと実感するのであろう。



日本女子大学周辺の概念図

# ジパング円は金本位制(?)

新井 宏

三十年以上も前から、世界各地、各時代のいろいろな金属の生産量や価格の歴史を調べているが、こんなことに精力を注いでいる研究を見掛けなかった。

それなら私がやってみよう。  
最大のネックは「古代」である。例えば、ローマ帝国時代の鉄の価格を示す「史料」など最近まで一つも見つからなかった。

それが最近一件だけであるが、英国ハドリアヌス長城のヴィンドランダ要塞から出土した八五三枚木片中に「鉄九〇ポンドが三二デナリウム」と読み取れる内容が記されていたのである。

永年探し求めていた史料が一件だけではあるが見つかった。そして、昨年末たった一件の史料に基づき『たたら研究』に十三頁にも及ぶ長文の論文を載せた。その筆者の心意気を評価して貰いたい。

まあ、そんなことは良いとして、金属価の収集は現代まで及んでおり、時々、その資料を眺めている。  
そして不思議なことに気が付いた。

ドルで示した円の価格と金の価格が完全に同調しているのである。そんな通貨は日本の円以外には全く無い。いわば、ジパング円だけが金本位制のもとにあるかのようなのだ。各通貨で買える金の量を年次別に示す。  
百ドルで買える金は一・八七ダから二・六九ダまで激しく変動しているのに、一万円で買える金は二・二二ダから二・三四ダにずっと納まっているのである。

年	一万円等価	百ドル等価
二〇一二年	金二・三四ダ	金一・八七ダ
二〇一三年	金二・二八ダ	金二・二三ダ
二〇一四年	金二・三二ダ	金二・四六ダ
二〇一五年	金二・二二ダ	金二・六九ダ
二〇一六年	金二・二九ダ	金二・四八ダ
二〇一七年	金二・二五ダ	金二・五六ダ

こんなことを次号の『まんじ』に書いたので「埋め草」として載せる。

